

ラボの世界

THE WORLD OF LABO

TOPIC

情報を全身でつかむ
文化人類学者！

P.1～3

- 1 10代とともに 手をのばしてキャッチしよう！
- 4 ラボ・インターンの
SPECIAL ENGLISH PROGRAM!
- 6 教師のためのことばセミナー
学校教育の視点から見た、ことばへの気づき
- 7 Go Ahead! 異文化に出会う旅



ぜ～ったい
また会おうね！



10代とともに

広瀬浩二郎

Kojiro Hirose

1967年、東京都生まれ。文化人類学者。国立民族学博物館准教授。自称「座頭市流フィールドワーカー」「琵琶を持たない琵琶法師」。13歳のときに失明。筑波大学附属盲学校から京都大学に進学。2000年、同大学院にて文学博士号取得。専門は日本宗教史、触文化論。「ユニバーサル・ミュージアム」（誰もが楽しめる博物館）の実践的研究に取り組み、「触」をテーマとするイベントを全国で実施。21年、国立民族学博物館において特別展「ユニバーサル・ミュージアム——さわる！ “触” の大博覧会」を担当。『目に見えない世界を歩く』（平凡社新書）、『それでも僕たちは「濃厚接触」を続ける！』（小ざ子社）、点字つき触る絵本『音にさわる』（偕成社）など著書多数。



手をのばして キャッチしよう！

あることをするのにその方法はひとつではありません。不自由かそうでないかは、「いる世界」で違います。情報をつかむのに待っているだけではいけません。情報をつかむのは目だけでもいけません。全身で感じ、全身でつかみ、全身で表現してみよう。昔の人にできたことが現代人にできないということはない……。広瀬先生のことは希望がありました。未来がありました。私たちも待ってないで全身でつかみにいきましょう、未来を。

盲学校に入るまで

ぼくは国立民族学博物館で仕事をしています。大阪に住んでいます。小学生のときはまだ目がみえて、一般の小学校に通い、戦国武将の話が好きでよく伝記などを読んでいました。そして学芸会などに出るのがわりと好きでした。目立ちたがり屋なんだと思います。

小5の前半から文字が見えなくなってきましたが、小学校卒業まで点字を覚える踏んぎりがつきませんでした。母親に教科書をカセットテープに吹きこんでもらって勉強して、けっこうそれで頭に入りました。とくに記憶力がいいというわけではないです。みなさん歌詞を覚えていてカラオケでうたえますよね。ぼくも50曲くらいはうたえます。それと同じことだと思います。

弱視だったので、中学生になるときから盲学校に行きましたが、失明したときのことははっきりと覚えています。中1の3月13日金曜日、盲学校の体育館で卒業式の予行演習をしていました。その当時は視力が0.05あったんです。それが体育館で座っていたら目がかすみだして、こすってもこすってもダメで、これはおかしいと思って予行演習のあと、電話して母親に来てもらいました。大学病院に連れていってもらってそのまま入院して1週間くらいで完全に見えなくなりました。入院

当初は廊下を歩いてトイレに行っていたのが壁ぎわに歩いていってもワゴンにぶつかるようになったりしてとても不安でした。でも退院後に盲学校に復帰したら、1学年15人のうち半分が全盲だったので、彼らに会ったときスーッと気が楽になったのを覚えています。点字だって「彼らだってできているんだから自分だってできるだろう」なんて思えました。

いる場所が変われば世界は変わる

盲学校は小学校までと違ってみんな視覚障害の子ばかりで仲間はずれにはならないんです。「ここにいていいんだ」と思えましたし、点字にも慣れていって、中高6年間、盲学校に楽しく通いました。属している集団によって世界って変わるんだな、とわかりました。たとえばみなさんもふだんは日本語でコミュニケーションしていますが、外国に行くと変わりますね。いる場所によって不自由さも変わるんです。両親はいまだに「見えないとかわいそう」なんていいますが、むしろ新しい世界に入るという楽しみもあったんです。

小学校では、図工の時間に先生は彫刻刀の使い方を「見せて」教えていました。ぼくは見えないからわからない。我流でやるとうまくいきませんでした。体育も走り幅跳びなん

かは「危ないからやめときなさい」ということになりました。でも盲学校では走り幅跳びでも「助走を9歩」なんて覚えてするんです。違う感覚、やり方でできると知りました。美術でねんどを使うときも手取り足取り教えてくれました。小学生のときは「自分は不器用なのかな」なんて思うこともありましたが、そうではなかったんだ、とわかりました。

ぼくの仕事

国立民族学博物館は、1970年の大阪万博の跡地、万博記念公園にあります。多くの博物館は展示がメインですが、ここは研究博物館といって大学院大学が併設されていて、研究に力が入られているんです。ぼくはここに2001年に就職しました。本を書いたり、論文を書いたりしてきました。

みなさんが博物館でイメージするのは、「見学」ですよ。「見て学ぶ」施設に、なぜ「見ることができない」ぼくがいるのか。博物館は「見せるくふう」をしているけれど、ぼくはみんなにもっといろいろな感覚をつかってほしい……と思いました。そして「触る」ワークショップをしています。たとえば彫刻作品。ブロンズでも木でもいいのですが、触って鑑賞したときの感動、その作品のエネルギーを感じるというのがあるんですね。なぜかとい

10代とともに



えば彫刻する人というのは手をつかっていますから、鑑賞する人もいっしょに

作っているかのような追体験ができるというのがあるのです。

コロナが絵本をかくきっかけに

ぼくは研究者なので、いろいろな本を書きましたが、どうしても理屈っぽいものが多いんです。自分が感じていることをもっといろいろな人、子どもたちにも伝えたい……目が見える人が気づかないことを伝えたい。そう思った頃、コロナで在宅勤務になって考える時間が増えました。そしてあるイラストレーターに出会いました。目が見えている人も触って感じられる絵本をつくりたいという話になりました。当然、絵本をつくるのははじめて。これまで理屈で生きてきたぼくに編集者は「文字ばかりじゃ読者はみませんよ」といって、文字がとても少ないものになりました。それでぼくは、文字でもいいたいので、絵本の裏にメッセージを文章で書きました。

絵本『音にさわる』の内容について



【春のページ】

絵本の文字：サクラは かたくて やわらかい

ぼくが働く博物館はサクラの名所にあります。3月始め頃から咲きはじめて、例年、花見で大勢の人が来ます。ぼくは通勤で朝早い時間、夜遅い時間にここを通ります。公園が休みの日なんかはもうサクラをひとり占めです。ちょっと触って、あ、まだつぼみがいくぶん硬いから開花はもう少しかなあ、などと日々触って感

じるんです。

【夏のページ】

絵本の文字：セミは 小さくて、大きい

セミって最初は小さくジージーと鳴いては止んで、鳴いては止んでなんですが、そのうちワシャワシャワシャとなっていく。そういう変化がおもしろいんです。ぼくがこの博物館で働きはじめた頃はいまよりセミが多くて、いわゆる「セミしぐれ」で頭がクラクラして方向もわからなくなってしまったんですが、最近は適度に数が減ってきて、イヤではなくなりました。音で暑さを運んでくる昆虫だなあ、ああ、こいつも一生懸命生きてるんだなあ、と思ったりしますね。

【秋のページ】

絵本の文字：おち葉は かるくて、おもい

秋、公園には大量の落ち葉があります。ぼくは踏みしめる感じが好きで葉っぱがたまっているところを踏んだりもします。落ち葉の1枚ずつは軽いですけど、まとまると重いですね。二項対立でなく、「かるくておもい」「かたくてやわらかい」などいろいろあります。

絵本の文字：かぐ「手」

人間には「五感」がありますね。「視覚」は目で、「聴覚」は耳で、「嗅覚」は鼻で、「味覚」は口で……偶然かもしれませんが、五感のうち4つは顔、というか頭部に集中しているわけです。ところが「触覚」はというと……みなさんまず「手」で触ることをイメージされると思うんですが、じつは「触覚」は全身に分布しているんです。ぼくはいま座って、お尻にイスを感じているし、背もたれでイスを感じているし、スリッパをはいて机の下フローリングの硬いのを感じていますけれど、これ全部、触覚ですよ。

「嗅覚」は鼻でかいでいるんだけれど、でもそれも、匂いの物質が鼻の粘膜を刺激して

感じるわけだし、音っていうのも音の波動が鼓膜をふるわせて感じるわけだし、想像すると変かもしれないけれど、鼻から「手」が出て、耳から「手」が出て……いろいろなところから手が出て情報をキャッチしている、そんなふうイメージしました。

【冬のページ】

絵本の文字：ゆきは つめたくて、あたたかい

雪国の人はかまくらなんかを作って中に入ると意外とあたたかいとか、遭難しそうなのに雪に穴を掘って中に入るとあたたかいとかいいますよね。ぼくも2回目にアメリカに留学したときはニュージャージー州でしたが、雪がたくさん降って、歩道の雪かきをして積み上げてかなり大きな壁になっていました。その壁ぎわを歩いていると、もちろん風が来ないというのもありますが、寒いけど意外とあたたかいんです。

この冬のページは、左ページと右ページで時差をつけて、ちらちらと降っているときと、それが積もった場面で変えました。

絵本の文字：天と 地が、つながる

雪がふると、音の聞こえ方が断然変わります。音が吸収されるのですごく静かになります。杖をついていても、ふだんコーンコーンという音が出るところがぜんぜん響かなくなって、なんだか天と地がつながって音が吸収されていく感じがするんですね。でも特段ぼくに感性があるわけではなくて、目の見えるみなさんも視界を遮断すれば、いろいろな音や匂いに気づけると思うんです。

『耳なし芳一』で考えられること

江戸時代に寺子屋が普及するまで文字をつかわない人が大多数でした。ぼくの盲学校のときと同じで、文字をつかわないことになんの不自由もなかったんです。手紙を書かないで歩いて話をしにいきました。電気もないの

10代とともに

で夜はまっ暗でしたが、視覚以外の感覚もつかって活動していました。たとえば針仕事で糸を通すのにくちびるや舌をつかったり、暗がりを歩くときは川の匂いなどを感じて歩いたりしました。

『耳なし芳一』は江戸時代に各地で語られた民話がベースですが、視覚重視の時代へ変わるときを象徴する話だと思います。当時は少なかった、文字をつかう人である和尚さんと、音と声の世界の怨霊たちに芳一は綱引きされて、耳を引きちぎられました。

和尚さんは般若心経の文字によって怨霊の世界から芳一を見えなくしたし、両方の世界を行き来できる彼の能力を封印した、ともいえると思います。よかれと思ってしたことが、そうではなかったりするんです。

それからこの物語、目の見えない芳一が耳まで引きちぎられてしまうなんて、と思ったりますが、じつは最後に芳一は琵琶の名人になってお金持ちになりました。耳に頼って

いた芳一が耳を引きちぎられたことで、聴くというのは耳だけじゃないと気づいたのではないかなと思います。全身で音をとらえ、全身で演奏することによって名人になったのだらうと、ぼくは解釈しているんです。

平家物語を伝えてきた琵琶法師のことでいうと、これは目の見えない人たちが一生懸命やっているから、という福祉の心で何百年も続いてきたわけではなくて、やはり芸能としてすばらしいからなんですね。注目すべきなのはそれを聴いていたのは圧倒的に目が見える人たちだったということです。目に頼りすぎず、音と声からイメージを広げる力があつたということです。

いまの時代、テレビ、ネット、スマホ、YouTubeなどは便利だし、それらでいろいろなことがわかります。ただ、現代人は「自分で想像する」という力が弱いと思います。どうしても受動的です。たとえば「触る」というのは自分から手を伸ばし、動かすことに

よって情報を増やしていくので能動的、アクティブになるんです。琵琶法師が活躍した時代の人たちは、「音を聴く」というときも、耳から手を出して音をキャッチして自分で物語をつくっていったので、琵琶法師の語りもゆっくりになる。いまと真逆で、「よりゆっくり」「より少なく」でした。

10代のわかものへのメッセージ

ぼくは戦国武将が好きだったことがいまの仕事につながっていると思います。盲学校で「目の見えない人の仲間になるのか」と思ったけれど、楽しかったし、いろいろな訓練になりました。中高生みなさん、1日1日をだいににしてほしい。大学生みなさん、ぼくは大学時代がいちばん楽しかったです。まさに青春でした。二十歳前後は楽しいときです。社会人になると時間に余裕がないので、ぜひいま、いろいろな経験をして、いい社会人になってください。(文責：編集部)

インタビューを終えて

[取材協力] 四国のラボ・パーティ

岡本美智子P、標葉直美P(愛媛県)、後藤直美P、松村佳子P(徳島県)、日中早恵子P、佐々木嘉美P(香川県)

岡本美智子パーティ

●篠崎倫太郎(中2) ぼくは広瀬先生が失明したことで絶望したのでは、と思ったけれどそれとは真逆で新しい感じ方ができるようになったといわれて驚きました。先生はサクラを見るのでなく触って感じるそうです。『音にさわる』では先生の独特な表現がつかわれていて、夏のセミの場面では「じりじり」と夏の音を表現しててうらやましく思いました。

標葉直美パーティ

●吉岡空良(中2) 「視覚がないからこそ得られた体験は？」と質問したら、「駅やお店でほかの人よりアナウンスが耳に入りやすい」といわれました。予想より「日常的」なお話でびっくり。ふだんから生活が違うのだなと気づきました。ほかにも先生の体験や『音にさわる』のことなど、自分にはない感覚ばかりでした●長友明日香(中3) 全盲だからこそ体験できること、できないことについてお話ししてくれました。ふつうの小学校でできなかったことを、盲学校ではやり方を変えてして

いました。どうすればできるかを考えるのがたいせつだと思いました●高橋咲季(高1) 見えないからこそできることを前向きに話されている姿が印象的でした。自分の好きなことに夢中になったり、目標をもてがんばれる話を聞き、私も目標をもってがんばっていいこうと思いました。また、景色や音や匂いも意識して生活してみようと思いました●長谷川杏乃(大3) 視覚の占める割合が中世で近現代よりも少なかったのはなぜだろうと思っていたが、識字率が低く、夜は暗闇にいるから聴覚の占める割合が大きかったとお聞きしました。暗闇では目の見える人も見えない人も同じ感覚世界にいるという発想が興味深かった。琵琶法師という職があって『耳なし芳一』が活躍できた理由がこんな時代背景にもあると思うと、『耳なし芳一』のテーマ活動(劇活動)をしたくなった。「可視化はほんとうに進歩なのか」を考えていきたい。

後藤直美パーティ

●村部寿珠(高1) 『音にさわる』でオノマトペをだいににされたこと

が印象的。春夏秋冬の表現でそれぞれに感じるオノマトペを意見交換するといったこと。また、「やわらかいとかたい」のように対義語が共存してもいいということばに感銘を受けました。

松村佳子パーティ

●磯田理央(中2) 「全盲なのは、新たな感覚に気づけるから楽しいこともある」といわれてすごいと思いました。私は失明したらきつと落ちこんでしんどくなっちゃうので。案外私みたいに生活していて、それもびっくり。休日に野球のTV中継をみる(聞く)といわれ、クスクス笑ってしまいました。

日中早恵子パーティ

●演 春花(高2) 失明してしまったのに留学しようと思った勇氣や好奇心がすばらしいと思いました。また、合気道という自分のできごとで海外の方の心をつかみ……すべてポジティブにとらえることにとても敬意をもちました。目が見えなくても自分のできることを最大限やってみせた姿勢がかっこいいです●富田彩花(高3) ふだん視覚に頼りきっていることに気づけました。昔の人はどのように夜を過ごしていたのか、目の見えない人は時間や季節をどう感じているのか、など

想像するきっかけになりました。

佐々木嘉美パーティ

●吉岡咲喜(中1) 私は広瀬先生の挑戦する姿がいちばん心に残りました。博物館でのワークショップのお話を伺ったとき、こんなことができたのか!?と驚いたし、感動しました。また別の視点からものごとをとらえることのおもしろさやたいせつさを学べました。私は生きていることの喜びを感じ、限りのある自分の人生の瞬間瞬間をたいせつにしていきたいです●田中千紘(中1) 目で見ただけでなく手で触って感じることもたいせつだとわかりました。絵本もことばや絵が親しみやすく、冬の場面での時計のくふうもすごいと思いました。各場面に独特な擬音語が入っていましたが想像できるものとできないものがあり、今度その音を探してみようと思いました。これからは触覚もたいせつにしていきたいです。そして、琵琶法師についてもっと知りたいと感じました●藤本桜奈(高2) 「聞こえているけど聞いている」ということばが印象的でした。どれだけ視覚からの情報に頼って生活をしているかということに気づかされました。一度立ち止まって、自然を五感で感じるということをしてみたいと思いました。

[取材日] 2023年1月

2022-23 ラボ・ウインターキャンプ

ラボ・インターンの Special English Program!

長野 くらひめキャンプ

ラボ・インターン (アメリカ・オレゴン州)

Kailee Stinnett



年末年始に行なわれた、ラボ・ウインターキャンプ。くらひめとかんなべの2か所で、「英語をつかうのが楽しくなる」特別プログラムが実施されました！そこに参加したインターンのKaileeとAudreyの活躍をご紹介します。

Opening Ceremony



English Special Lodge Original Program



Day2

Kailee は、黒姫の雪景色を見て故郷のオレゴンを思いだしたそうです。

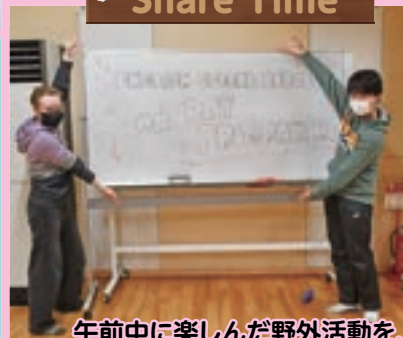
Outdoor Activity

「The Coolest Fight!!」コース。
英語で進行役！
ひざ下まで積もった新雪のなかで、
60名の参加者と、英語で
ゲームを楽しみました！

Day3



Share Time



午前中に楽しんだ野外活動を、

みんなで英語でシェアしました。

Kailee のサポートもあって、盛りあがりました！



80名の参加者で、英語の歌“Down by the banks”のゲームをしました。

Camp fire



まっ暗ななか、聞こえてきたのは……。Kailee の歌声で参加者がキャンプファイアの会場に集まりました。みんな歌声にうっとり。

兵庫 かなベキャンプ

ラボ・インターン (アメリカ・ミネソタ州)

Audrey Johannes



Self - Introduction



作ったアルバムで, Audrey が英語で自己紹介してくれました。
Audrey がどんな人かみんな興味津々で聞いていました。

Outdoor Activity

Day2



グループ別で, 神鍋の自然のなか, 思いきり楽しみました!
みんなも Audrey と遊べて, とてもうれしそう!



Presentation



2日間にわたる, Audrey の
プレゼンテーション「Culture Shock!」
アメリカと日本の文化の違いを,
英語でプレゼンしてくれました。
「日本のジュースは小さい!」
「ピースをつけて学校に!」など,
驚きの連続。
3日目には, 参加者の英語での質問もたくさん出ました!

Day2-3

Culture Shock!

Japan v. USA

Portion Sizes!



夏の受入れしませんか?

◆海外からの国際交流受入れ◆

日本にしながらできる国際交流をしてみませんか?

※日程をはじめ, くわしいことは配布されるご案内をご覧ください

●北米青少年日本語研修生受入れ (首都圏のみ)

期間: 6月17日(土)~7月14日(金)

※幼児・小学生のラボ会員家庭も受入れ可

●北米青少年ホームステイ交流受入れ

期間: 7月14日(金)~8月10日(木)

対象: 新中1以上のラボ会員家庭

●ラングブリッジ日本語研修生受入れ (首都圏のみ)

期間: 7月15日(土)~8月6日(日)

※幼児・小学生のラボ会員家庭も受入れ可

●韓国青少年ホームステイ交流受入れ (首都圏のみ)

期間: 8月5日(土)~14日(日)

対象: 新小5以上のラボ会員家庭

学校教育の視点から見た、 ことばへの気づき

12/18
(日)

教師のためのことばセミナー 2022 年

第5講

東京言語研究所では毎年、ことばの教育に関心がある人にむけた、「ことばへの気づき」を利用した実践とその理論背景を紹介するセミナーを実施しています。

前号では、第2講を紹介しました。今号では、巨理陽一氏（中京大学）による第5講「学校教育の視点から見た、ことばへの気づき」のようすを紹介します。

巨理陽一氏
(中京大学)



中京大学国際学部教授。中部地区英語教育学会、外国語教育メディア学会関西支部運営委員を務めた後、現在、一般社団法人ことばの教育理事、日本教育方法学会理事。著書に『どうする、小学校英語？—狂騒曲のあとさき』（慶應義塾大学出版会／大津由紀雄との共編）など。

ことばセミナースケジュール

10/16 (日)

ことばへの気づき
と小中高校種別
対応可能性

大津由紀雄
・関西大学

10/30 (日)

ことばへの気づき
を利用した小学校
での授業実践

北野ゆき
・守口市立
錦小学校

11/20 (日)

ことばへの気づき
を利用した大学で
の授業実践

向後朋美
・十文字学園
女子大学

12/4 (日)

ことばへの気づき
を利用した国語科
と英語科の連携

榎木貴之
・北海学園大学

12/18 (日)

学校教育の視点から
見た、ことばへの
気づき

巨理陽一
・中京大学

今回



授業風景

中学校3年の英語の教科書にキング牧師についての物語文があります。Martin Luther King Jr.です。一方、社会科では宗教改革を進めたルターが登場しますが、キング牧師（と彼の父）の名が彼とまったく同じつづりで、まさにマルティン・ルターその人にちなむものであることを私が知ったのは、ずいぶん後のことです。

もうひとつ、私が育った北海道には、北広島や新十津川などの入植者の出身地にちなむ地名が多くあります。アメリカにも、New HampshireやNew Jerseyなど、イギリスの地名にちなむ名前で同様の現象を確認できます。一方で、Los Angeles

やSan Franciscoなど、西海岸に英語っぽくない地名が多いのはなぜか。北海道には、札幌をはじめとして、アイヌ語に由来する地名もたくさんあります。幌・別・内といった漢字をふくむ地名を集めると共通する意味が見えてくるかもしれません。

このように人名・地名はことばの歴史と変遷の宝庫で、教科をまたいでそうしたことばをとりあげる機会、そのことによって授業がより豊かなものとなる可能性は学校教育のなかに遍在しています。

この5つは「店」でしょうか？

「店ではない」でしょうか？

「無人のコインランドリー」は店なのか？「並んだ自動販売機」は？と考えていきました。「人がいれば店」「物を売るのが店」など、人によって意見はさまざま。



たとえば英語に注目してみると、「shop」は「小屋」からきていることば。「store」は取って置くという動詞からきています。

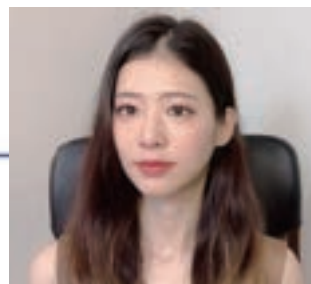
このように、外国語の意味を追っていくことも、「ことばへの気づき」につながります。そんな日常のなかにある題材についても紹介しました。

(文責：編集部)

異文化に出会う旅

白壁明莉

日本語教師



私はいまマレーシアのクアラルンプールに住んでいます。そしてフリーランスの日本語の先生として、オンラインで世界中の学生に日本語を教えています。

国際交流に参加したのは中学2年生のとき。その1年前から事前活動をしていたけれど、自分が「来年の夏アメリカにいる」なんて想像できませんでした。あまり現実味がない感じだったんです。そんな気持ちのまま、気づけば夏が来て、アメリカのニューハンプシャー州に1か月のホームステイ。

英語は学校で勉強した程度であまりわからないまま行っただけで、最初



はコミュニケーションがとれなくて孤独を感じることもありましたが、でも、ホストやその友だちが、ことばが通じないなりにいっしょに時間を過ごしてくれたおかげで、少しずつ心が通じあうようになったと思います。最後は、ホストファミリーとも友だちとも泣きながら別れを惜しむほどなかよくなることができました。

私がホームステイから得たことはふたつ。ひとつ目は、言語に対する気持ちの変化です。当時英語が話せなくてもどかしい思いをしたので、帰国してからラボの物語CDの聴きこみに力を入れたり、積極的に英語を勉強したりしはじめました。また、英語だけでなく語学全般に興味があり、大学生時代は、スペイン語、イタリア語、ドイツ語なども勉強しました。今後ますます英語の必要性は高まるといわれているし、10代のうちにこの情熱をもつことができよかったです。

1か月では流暢に話せるレベルにはならないけれど、少なくともネイティブの英語にふれるという意味で

はホームステイは最高の機会だったと思います。

ふたつ目は、異文化体験がどれだけ重要か気づけたこと。あのとき、10代で自分の文化とはまったく異なる文化を経験して「世界にはいろいろな人がいる」という、いってしまえばあたりまえのことを肌で感じることができました。そしていま、こうして、世界中の人に日本語を教える仕事をしています。いまの仕事を通してほんとうに多様な人々や価値観に出会いますが、自分と違うからといってかんたんに拒絶してしまうのではなく、受け入れようとするのができるのは、国際交流で培った異文化に対する土壌が自分のなかにあるからだだと思います。

「多様性」が叫ばれるこの時代、ぜひ異文化を自分の目で見て、感じとってほしいです。

しらかべ あかり＝日本語教師

「Nihongo for You」を運営
(山形県・佐藤敬子パーティ→宮城県・飯澤寛美パーティ OG)

Information

一般財団法人ラボ国際交流センター

◆理事会・評議員会

予算理事会：3月16日(木)、予算評議員会：3月31日(金)

決算理事会：5月16日(火)、決算評議員会：5月31日(水)

◆海外への訪問プログラム

○第36期高校留学生準備合宿

日程：5月5日(祝・金)～7日(日)

会場：国立オリンピック記念青少年総合センター(東京都渋谷区)

○全国国際交流引率者会議

日程：5月20日(土)～21日(日)

会場：ラボセンター新宿本社

東京言語研究所

◆集中講義

日程：3月18日(土)～19日(日)

講師：野村益寛(北海道大学教授)

演題：認知文法のトピックス

◆春期講座

理論言語学の主要な研究領域を2日間で広く学ぶことができます。

日程：4月15日(土)～16日(日)

講師：大堀壽夫(慶應義塾大学教授)

ほか15名

◆理論言語学講座スタート

言語学のひろい領域について、今年度は入門から上級まで19課目を開講予定です。

日程(前期・後期 各10回)：5月15日(月)～12月15日(金)

※8月に夏期集中講義あり

◆公開講座

日 程：6月3日(土)

講 師：岡ノ谷一夫(帝京大学教授)

テーマ：未定

日 程：7月1日(土)

講 師：和泉 悠(南山大学准教授)

テーマ：未定

※くわしくはFacebookをご覧ください

Access <http://www.facebook.com/LaboJapaneseLanguageInstitute>

LaboJapaneseLanguageInstitute